

〈研究資料〉

## パラリンピックを教材とした中学校体育理論領域における授業の効果検証： 身体障がい者イメージとオリンピック・パラリンピックへの意識に着目して

乳井 勇二<sup>1</sup>

YUJI CHICHI<sup>1</sup>

### 緒言

#### 1) パラリンピック教育の現状と課題

2021年に開催された東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京大会）のレガシーの一つであるオリンピック・パラリンピック教育（以下、オリ・パラ教育）は開催地である東京都（東京都教育委員会、online）をはじめ、全国各地（スポーツ庁、online）で行われている。日本におけるオリ・パラ教育は、①スポーツの意義や価値等に対する国民の理解・関心の向上、②障害者を含めた多くの国民に対する国民の幼少期から高齢期までの生涯を通じたスポーツへの主体的な参画（「する」、「見る」、「支える」、「調べる」、「創る」）の定着・拡大、③児童・生徒をはじめとした若者に対する、これからの社会に求められる資質・能力等の育成、を推進することを目的としている<sup>注1</sup>。

これまではオリンピックを題材とした実践が数多く報告されてきた。具体的には宮崎（2012）による古代オリンピック、フェアプレイ、オリンピックの価値等をテーマとした高等学校体育理論領域の授業指導案がある。その中では、短時間であるがディスカッションすることができ、生徒にも好評であったことが報告されている。吉中（2009）は中学生を対象にオリンピックを学習素材として実践した結果、オリ

ンピックがスポーツの側面だけでなく、政治や経済、人権の問題にまで深く関わっていること、体育を含めた多くの教科の学習が生徒の探求的な活動にうまく機能していく可能性を秘めた素材であることを再認識したと報告している。このようにオリンピックの理念や歴史的な背景について触れながら、体育を中心としながら、実践を積み重ねながら効果の検証が行われてきた<sup>注2</sup>。

その一方、近年は、共生社会の実現や多様性への理解が求められていることから、オリ・パラ教育の中でも特にパラリンピック教育（以下、パラ教育）の実践が増え始めている<sup>注3</sup>。佐々木（2018）は中学生を対象に、パラリンピックを学び興味関心を深めることを目的として国際パラリンピック委員会の公認教材である「I'm POSSIBLE」を活用した授業を実践している。その結果、生徒の興味関心を高め、振り返りカードからも障がい者への理解が深まったことが示され、教材としての価値を十分に有していると報告している。また、藤本・内田（2021）は高校生を対象にパラリンピック競技のeスポーツ及び実技体験が直接観戦意欲の向上に繋がり、特にeスポーツ体験が効果的であることを報告している。このようにパラ教育については、現代社会が掲げる多様性の方向性との繋がりが強く、高い教育的価値を備えうると考えられ、さらに充実させていくことが望まれる。

他方で岡田ほか（2021a）は英文学術誌にお

<sup>1</sup>Research Institute of Physical Fitness, Japan Women's College of Physical Education

けるパラ教育に関する研究動向について、パラ教育の効果検証の方法として障がい者に対する態度の変容を検討していくことが重要であると述べている。障がい者に対する態度の変容において、栗田と楠見（2010）は、「障がい者」表記が身体障害者に対する態度に及ぼす効果について検証し、ひらがな表記は接触経験者が持つ身体障害者に対する「尊敬」に関わるポジティブなイメージを促進させるが、接触経験の無い者が持つ尊敬イメージや、身体障害学生との交流の改善には「社会的不利」、「尊敬」、「同情」それぞれのイメージについて検討することが重要であると示されている。栗田と楠見（2010）における障がい者イメージの検証方法に着目した研究では、大学生を対象とした岡田ほか（2021b）、角田ほか（2018）、高校生を対象とした乳井ほか（2020）、松本ほか（2021）がある。このうち岡田ほか（2021b）ではシッティングバレーボール体験が大学生の「身体障がい者イメージ」に与える影響について、実践の前後において、「社会的不利」イメージの減少が確認できたことを報告している一方で、「身体障がい者イメージ」の変化と「性別」及び「障がい者との接触経験」の関係についてはどちらも影響を及ぼさなかったとを報告している。また、角田ほか（2018）は体験型授業及び講義型授業の障害者スポーツの学習が肢体不自由のイメージに与える影響について、どちらも肢体不自由者が参加できるスポーツについて大学生のイメージを向上させ、教育効果があると報告している。

さらに高校生を対象とした実践において乳井ほか（2020）は、体育理論領域の単元において、パラリンピックを教材として授業プログラムを作成し、障がい者イメージの変容について効果を検証した結果、「社会的不利」、「尊敬」、「同情」の全ての障がい者イメージ因子において障がい者に対する意識の変容がみられたことを報告している。また、松本ほか（2021）はパラアスリートの映像教材を活用した体育授業実践が

身体障害者に対するイメージに及ぼす効果について、社会的不利イメージ及び同情イメージに対し、肯定的な影響を及ぼしたことを報告しており、高等学校体育科の授業において、パラリンピックを教材として活用した実践では身体障がい者イメージの変容に影響を及ぼすことが示されている。このように大学及び高等学校においては身体障がい者イメージの変容など、パラリンピックやパラスポーツがもたらす影響について分析されており、今後もパラ教育の効果を踏まえた実践が広がることで、障がいや障がい者への理解が深まり、共生社会の実現に寄与できる人材の育成が望まれる。一方で、中学校を対象としたパラ教育については、実践報告が行われているものの（鳥居 2017：佐々木 2018）、十分な検証が行われておらず、中学生を対象としたパラ教育の効果的な実践方法についてはいまだ検討課題が多い。佐々木（2018）は中学校2年生を対象としてパラリンピックについての学習を実践し、パラリンピックの興味などについてアンケートを実施しているが、授業後アンケートのみであり、授業の内容に基づいた結果であるか不明である。さらに、質問内容についても先行研究を基盤とした内容であるかは不明瞭であり、統計的な視点から分析されていない。また、鳥居（2017）によるパラリンピック教育の目的に沿った出前授業についての報告では、実践の効果について検証されておらず、受講した生徒にとってパラ教育の目的となる共生社会への理解などについて効果的であったのかは示されていないことから、これらの先行研究については妥当性が低いと考えられる。

ところで、このようなオリ・パラ教育を効果的に実践するにあたり、児童・生徒のオリンピックやパラリンピックへのそのものの興味・関心やオリンピックやパラリンピアンへの意識を検証し、高めていくことも重要である。スポーツ庁が行った「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業（以下、オリ・パラ事業）」（スポーツ庁、online）における最終成

果報告書（日本体育大学，2022，p9～10）によると，オリ・パラ教育の実践により児童・生徒のオリンピック・パラリンピックへの興味・関心が高まったことが報告されている。また，秋本と澤江（2020）は，公立中学校並びに国立の特別支援学校に所属する肢体不自由児，聴覚障害児，健常児を対象として，オリンピック及びパラリンピックへの関心，オリンピック及びパラリンピアンへの意識について調査した結果，「東京オリンピックを観たいですか」という質問では肢体不自由群に比べて健常群の方が興味が低く，「東京パラリンピックを観たいですか」という質問でも肢体不自由群よりも聴覚障害群と健常群の方が興味が低い結果であることを報告しており，オリンピック・パラリンピック共に，障害群よりも健常群の方が興味が低いことが明らかになっている。障害をもつ中学生にとってパラリンピックだけでなくオリンピックからもエンパワメントを受けている可能性が示されているが，健常の中学生ではオリンピック・パラリンピックそのものへの関心が低い可能性があり，普通学級へのオリ・パラ教育の充実が求められる。また，学校現場におけるオリンピック・パラリンピックへの興味・関心などの現状を把握するための調査を実施することも重要であり，授業実践の効果を検証していくことで授業内容検討の一助となるであろう。このようなオリ・パラ教育の実践の場となるのが，オリンピック・パラリンピックが学習内容として明記されている体育理論領域である。実際に友添ほか（2020），深見ほか（2021）はオリ・パラ教育の実践について，体育・保健体育での実践が多いことを報告している。中学校の体育理論領域では年間を通して3単位時間以上行うことになっている注2。近藤ほか（2017）は体育理論の授業について，年間2～3時間程度実施していると報告しているが，現実的には時間数や指導方法に関する知識の欠如などもあり，中学校の教師の体育理論に対する意識はそれほど高いものではない点も明らかにしている。ま

た，中学校の体育教師がオリ・パラ教育を展開できるようになるための環境整備が大切になると指摘している。このような現状を踏まえると体育理論領域における実践研究を積み重ねていくことは現場で苦手意識を示している体育教師にとっても有益であり，その結果，中学生がオリンピック・パラリンピックについてより深く理解することは東京大会のレガシーという観点からも，今後益々必要性が高まることが考えられる。

オリ・パラ教育の重要性について2017年に改訂された中学校学習指導要領<sup>注2</sup>では，「保健体育科改訂の趣旨及び要点」③改善の具体的事項において，以下のように示されている。

（ウ）スポーツの意義や価値等の理解につながるよう，内容等について改善を図る。特に東京オリンピック・パラリンピック競技大会がもたらす成果を次世代に引き継いでいく観点から，知識に関する領域において，オリンピック・パラリンピックの意義や価値等の内容等について改善を図る。

このような方向性から中学校体育理論領域第3学年「文化としてのスポーツの意義」における，「（イ）国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な役割」，の中で，「オリンピックやパラリンピック及び国際的なスポーツ大会などは，国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていること。」と示されており，初めて「パラリンピック」が学習内容として明記された。

さらに学習指導要領第3章指導計画の作成と内容の取扱いの中で，「体育分野におけるスポーツとの多様な関わり方や保健分野の指導については具体的な体験を伴う学習の工夫を行うよう留意すること。」と示されており，オリンピック・パラリンピックに関する指導の充実を図る観点から以下のように示されている。

パラリンピック競技大会で実施されている種目

などの障害者スポーツを体験するなどの工夫も考えられる。その際、障がいの程度や特性にかかわらず、全ての生徒が実施可能な体験となるように留意することが大切である。

このような点からも、さまざまな面に配慮や準備等が必要であるが、中学校の体育理論領域等において分野や領域を横断しながら障がい者スポーツ等の体験を交えながら授業を展開するなどの授業の工夫により、保健体育という教科の中でスポーツや運動という観点だけではない教育的な効果が期待されている。以上より、文部科学省が示したオリ・パラ教育の重要性と、これらの実践の場となる中学校体育理論領域におけるオリンピック・パラリンピックに関する学習、特にパラリンピックを教材とした授業実践の効果を検証していくことは、生徒の障がい者イメージの変容に繋がるだけでなく、体育理論の実践を苦手としている体育教師への負担軽減に繋げることが可能となるであろう。

## 2) 目的

本研究の目的は、近年の共生社会の実現や多様性に関する社会的な理解の深まりとともに、充実が求められているパラ教育の中心的な実践の場となる、中学校第3学年の体育理論領域「文化としてのスポーツの意義」における、「国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な役割」の単元において、パラリンピックを教材とした授業の効果を検証することである。特に、身体障がい者イメージの変容とオリンピック・パラリンピックの意識の変化について検証した。

## 方法

### 1) 対象

対象は3つの中学校に所属する3年生311名(A校53名、B校121名、C校138名)である。授業は学校ごとに実施し、B校及びC校は2クラスごとに分かれて行われた。授業は中学

校第3学年の体育理論領域「文化としてのスポーツの意義」における、「(イ) 国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な役割」の単元内で実施した。授業時間は50分であった。

### 2) 授業プログラムの考案

授業プログラムの考案については、高等学校第1学年体育理論領域の中でオリンピック・パラリンピックについて学習する「現代のスポーツの意義や価値」の単元で実践研究を行った乳井ほか(2020)を参考に、中学生の知識・関心レベルを考慮した上で、中学校体育理論領域の学習内容を踏まえ作成した。なお、授業プログラムの作成にあたり、文部科学省検定済教科書である大修館書店「最新中学校保健体育」(pp124~127)、を活用し、具体的な資料や発問内容、活動内容については佐藤・友添「楽しい体育理論授業をつくろう」、スポーツ庁政策課学校体育室編「オリンピック・パラリンピックに関する指導参考資料」、国際パラリンピック委員会公認教材「I'mPOSSIBLE」、中道(2014)を参照し、授業指導案(表1)に示した。また、パラリンピックを教材として活用する際に、岩田(1994)が作成した教材づくりの基本的視点を活用し、内容的視点として「学習内容」の明確さ、方法的視点として「学習意欲」の喚起を重視して授業プログラムを作成した。

### 内容的視点

内容的視点を検討する上で、上述した通り、「学習内容」の明確さを重視して作成した。「教材には、学習者に習得させたい認知的・技術的、そして社会的行動の学習内容が明確に盛り込まれている必要がある。」(岩田1994)という指摘を踏まえ、①わかる(知識・認識)、②できる(技術・戦術)、③かかわる(社会的行動)の3点を特に重視した。本研究では、中学校第3学年の「国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な役割」の単元において、2017年の改訂学習指導要領から新たに学習内容に加わった、「パ

表1 授業指導案

中学校第3学年 保健体育科 体育理論

単元名：国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な役割

本時の目標

パラリンピックについての理解を深め、共生社会の実現に貢献していることを理解出来るようになる。また、健常者が障害者等に対しポジティブなイメージを持てるようになる。

		学習活動	指導上の留意点
導入	パラリンピックの目的について理解する。	発問① なぜパラリンピックが行われるのか。	・何人かの生徒に答えさせる・
		説明① IPC（国際パラリンピック委員会）の目的 パラスポーツを通じてインクルーシブな社会（共生社会）を創出すること。 共生社会とは⇒これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障がい者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。 それは誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。	・ワークシートを活用し、説明しながら記入していく。 ・オリンピックの目的についても簡単に説明する。
展開	障害者について理解する。	指示① 1. 視覚障害者と健常者に分かれて、健常者が視覚障害者に対して言葉の指示だけでストレッチを行う。	
		活動① それぞれの立場による活動（障害者、健常者）を通して、制限された状況や言葉の選択など具体的な苦労した点や相手に対しての要望などについて話し合い、発表する。（ワークシート）	
	パラリンピックのはじまりについて理解する。	発問② パラリンピックはいつ始まったのか。	・何人かの生徒に答えさせる。
		説明③ グットマン博士が戦争で負傷した軍人のリハビリテーションにスポーツを活用。 「手術するよりスポーツを」という考えの元で車いすによるバスケットボール、卓球、アーチェリーなどを考案し、障害者によるスポーツ大会を開催したことが、現在のパラリンピックに繋がっている。	・ワークシートを活用し、説明しながら記入していく。
まとめ	パラスポーツを身近に捉え、障害者への理解を深める。	発問③ ・パラスポーツを作ってみよう 1. サッカー×視覚障害 2. 競泳×視覚障害 3. テニス×下肢障害 4. バスケットボール×下肢障害 ※パラリンピック種目を想定し、対象となる障害者が安全にスポーツを楽しむためのルールを考案する。	・できるだけ多く書けるように具体的な例を出しながら進める。
		活動② グループ内で話し合い、ルールの工夫や方法について発表する。	
		発問④ なぜパラリンピックが行われているのか。	改めて何人かの生徒に答えさせ、確認する。
		指示② リオデジャネイロパラリンピックのダイジェスト映像を見せる。	何人かの生徒に感想を聞く。
		説明④ パラスポーツは障害者を行うスポーツではなく障がい者と共に楽しむことができるスポーツ→障害者への理解が深まることで共生社会の実現に繋げることができる。 ※東京2020大会の3つのコンセプト（全員が自己ベスト・多様性と調和・未来への継承）についても説明（特に多様性と調和を強調する）。	

ラリンピック競技大会」に着目した。パラリンピックについては、「共生社会の実現」注3を目標としており、パラリンピックの開催が共生社会の実現に貢献していることについて理解を深めることが重要であると考えた。まず、「わかる」については、中道（2014）が作成した「中学校における体育理論の教材研究：パラリンピックに関する題材の場合」に記されているパラリンピック開催の目的やパラリンピックの始まりについて理解を深める学習内容を設定した。「できる」については、パラリンピックの競技種目であるブラインドサッカーや車いすバスケットボールを下位教材として、事前に競技については説明せずに、視覚障がい選手がサッカーや競泳、下肢障がい選手がバスケットボールやテニスをする際、対象となる障がい者が安全に楽しくプレイするためにはどのようにルールを工夫したらよいかについて考えていく学習内容を設定した。「かかわる」については、「できる」の学習内容となる「パラスポーツづくり」の際に、グループワークでクラスメイトとともに協力しながら答えを導き出し、役割分担をしながらグループ別の発表に繋げるなど、生徒同士が関わりながら課題を解決していく学習内容を設定した。

### 方法的視点

方法的視点においても上述した通り、「学習意欲」の喚起を重視して作成した。学習意欲を喚起するためには、「①学習者の興味・関心に配慮しながら、能力の発達段階に応じた適切な課題が提示されるべき」、「②すべての学習者に技能習得における達成やゲームでの学習機会を平等に保障していくこと」、「③取り組む対象が挑戦的で、プレイの面白さに満ちた課題であること」とされている。本研究における、「①能力の発達段階や興味・関心」については中学校段階としてパラリンピックについての基礎的な知識や興味・関心の状況を把握することが重要であると考えた。秋本と澤江（2020）はオリ

ピック・パラリンピックへの意識について調査した結果、健常の中学生はオリンピックに比べ、パラリンピックへの興味が低いことを報告している。また、実践を行った中学校3校の体育教師に対し、生徒のパラリンピックへの興味や関心について事前に確認したところ、生徒のパラリンピックへの興味や関心が低いことを実感しているとの回答があったことから、中学生はパラリンピックに関する知識は高くはないことが考えられた。そこで、パラリンピックの起源や開催の目的など、パラリンピックについて基礎的な知識を習得する学習内容を設けた。また、乳井ほか（2020）では「パラスポーツの開発」として障がい者とともにスポーツを楽しむためにルールや用具について検討する学習内容であったが、本研究では中学生という発達段階を考慮してパラリンピックやパラスポーツに関してイメージのしやすさを重視した。具体的には、既存のパラスポーツ（ブラインドサッカー、競泳、車いすバスケットボール、車いすテニス）を活用し、「①視覚障がい者とサッカーをするためには？」、「②視覚障がい者と競泳をするためには？」、「③下肢障がい者とバスケットボールをするためには？」、「④下肢障がい者とテニスをするためには？」どのようなルールにすると安全に楽しく行うことができるかという問いを設定し、イメージしやすく、意見を出しやすいような学習内容とした。さらに、興味・関心を高めることを目的として、パラリンピックリオデジャネイロ大会のダイジェスト映像を視聴した。次に「②学習機会の平等性」については、まず、教師からの発問の際に、短時間であるができるだけ多くの生徒に発表させた。具体的には表1の授業指導案の通りであるが、1つの発問から多くの回答が抽出できるよう、違った視点から答えられるようにヒントを与えながら発表させて。また、アクティブラーニングの方法とされているグループワークによって生徒一人ひとりが意見を述べる機会を設け、話し合いの結果を全体で発表するなど、全ての生徒が授業

に参加し、思考・判断できるよう配慮した。また、その際にグループのリーダーを設定し、グループのメンバー全員が回答できるように進めさせるなどファシリテーターとしての役割を担わせた。最後に「③プレイ性の確保」については、上記で記したグループワークによって全員でルール工夫を考える機会の中で、発言者に対しての疑問や考えを述べるなどの意見交換の場を設けさせた。また、パラリンピックを学ぶ上で基本となる障がいについて理解を深めることを目的として、「視覚障がい体験」を行い、健常者には視覚障がい者に対して言葉の指示のみでストレッチを実施させ、健常者と視覚障がい者の両者を体験させた。それぞれの感想や相手に対しての要望など、お互いの意見を交換する機会を設けるなど、座学として「パラリンピック」についての学習内容であるが、体験活動を導入して楽しみながら学ぶ機会を提供することを心がけた。

### 3) 調査項目及び分析方法

本研究では以下の2点について質問紙による調査を実施した。1点目は、「身体障がい者イメージ」についてである。栗田と楠見(2010)が作成した身体障がい者イメージ尺度を用いて、「身体障がい者に対する意識の変容」を測定した。これらは17項目の形容詞について、「社会的不利」、「尊敬」、「同情」の3つの因子で構成され、授業の前後で変化を分析した。因子ごとの形容詞については以下の通りである。

社会的不利：不利な、生活上危険、困難な、不

自由な、気の毒な、遅い、かわいそうな

尊敬：立派な、尊敬できる、あたたかい、頑張っている、偉い、優しい

同情：辛い、悪い、悲しい、不幸な

これらすべての形容詞について、7件法で回答を求めた。すべての回答結果は、「全くあてはまらない＝1点」、「当てはまらない＝2点」、「やや当てはまらない＝3点」、「どちらとも言えない＝4点」、「やや当てはまる＝5点」、「当て

はまる＝6点」、「非常に当てはまる＝7点」で点数化し、3つの因子ごとに平均値と標準偏差を算出した。

2点目は「オリンピック・パラリンピック大会への意識」である。秋本と澤江(2020)が作成した4つのカテゴリで構成された質問紙の中から、2つのカテゴリ（オリンピック大会への意識、パラリンピック大会への意識）を活用し、授業の実践前後での変化を分析した。質問紙は4件法を用いて、「思わない＝1点」、「あまり思わない＝2点」、「思う＝3点」、「とても思う＝4点」で点数化し、平均値と標準偏差を算出した。「身体障がい者イメージ」、「オリンピック・パラリンピックへの意識」共に、SPSS ver27を用いて授業実施前と実施後の各項目の平均点について対応のあるサンプルのt検定を行った。なお、事前アンケートは、当日または前日までに学級活動等の時間を利用して一斉に行い、事後アンケートは、授業終了直後に一斉に行った。

### 4) 倫理的配慮

対象の中学校の担当者に対して、本研究の目的を伝えアンケート調査への協力を依頼した。その際、アンケートへの回答は強制ではないこと、個人が特定されることはないこと、そして研究以外の目的で使用しないことを伝えた。さらに、実践を行う前に、生徒に対しても同様の説明し、匿名で回答を求めた。

## 結果及び考察

### 1) 身体障がい者イメージの変容について

本研究では授業の前後で栗田と楠見(2010)が考案した「身体障がい者イメージ」について質問紙調査を行った結果、「社会的不利」、「尊敬」、「同情」3つ全ての因子において有意に肯定的な変容がみられた(表2)ことから、本授業プログラムが障がい者へのイメージについてポジティブな変容を促すことが示された。

表2 身体障がい者イメージについての結果 (n=303)

		平均	標準偏差	t 値
社会的不利	pre	3.97	1.93	19.41 **
	post	3.29	1.82	
尊敬	pre	5.06	1.65	-3.50 **
	post	5.19	1.55	
同情	pre	3.08	1.83	4.90 **
	post	2.86	1.68	

\*\* .p&lt;0.01

「社会的不利因子」については、「不利な」、「困難な」、「生活上危険」、「不自由な」、「気の毒な」、「遅い」、「かわいそうな」といったネガティブな形容詞について回答しており、リオデジャネイロ大会のダイジェスト映像の視聴では、初めてパラアスリートがプレイしている姿を初めて観る生徒が多かった。中でもパラリンピックで活躍したトップアスリートの能力に感銘を受けている様子もあり、ポジティブな変容に繋がったと考えられる。高校生を対象とした乳井ほか (2020) や松本ほか (2021) についても、社会的不利因子が変容した要因としてパラアスリートの映像を視聴したことが影響していると報告しており、ほぼ同様の結果が中学生においても得られることが確認された。また、岡田ほか (2021b) はシッティングバレーボール体験により、身体障がい者イメージの中でも社会的不利因子が変容したことについて、体験を通して障がい者の能力に対する評価が高まったことを報告している。本研究ではパラスポーツ体験はできなかったが、視覚障がい者体験を行った。生徒の感想からも「目が見えない大変さを知った」、「今まで視覚に頼って生活していることがわかった」など、視覚障がい体験が印象に残っており、大学生を対象とした岡田ほか (2021b) と同様に、中学生においても障がい者に対する評価が高まり、「社会的不利因子」が変容しうることが示された。

「尊敬因子」については、「社会的不利因子」と同様にパラアスリートの映像視聴が影響していることが考えられる。上述の通り、リオデジャネイロ大会のダイジェスト映像ではパラアス

リートが活躍している姿が多く、それらを初めて観る生徒がほとんどであったことから、これまで観たことのない障がい者の姿を目の当たりにして尊敬へのイメージが強まったと考えられる。先行研究では松本ほか (2021)、岡田 (2021b) では「尊敬因子」の変容がみられなかったことが明らかになっている。松本ほか (2021) はその要因として授業実践の中で、パラアスリートを過度に賛美することに対する疑問を投げかけたことが影響していると報告している。本研究ではパラリンピックやパラアスリートについて興味・関心が高くない中学生に対して、障がい者体験やパラスポーツづくりなどを通じてパラリンピックや障がいについて理解を深めていくことを目的としていた。特に「パラスポーツづくり」では障がい者と共に、安全に楽しくスポーツを行う方法について考案した。これにより「障がいがあると何ができて、何ができないのか」「障がい者は何を必要としているのか」など、中学生においても障がいや障がい者についてより具体的で深く考えるタイミングとなったと考えられ、障がい者の大変さや、その中で、日常生活だけでなくスポーツに取り組んでいることを知り、「尊敬因子」の変容に繋がったと考えられる。

「同情因子」については、パラリンピックの発祥や開催の目的について学習したことや、パラスポーツづくりが影響していることが考えられる。まず、パラリンピックの発祥については、「ルードヴィッヒ・グッドマン博士が戦争で負傷した兵士のリハビリテーションとして車いすによるアーチェリーやバスケットボールを取り入

れたこと」や、現在のパラリンピックの目的が「共生社会の実現に貢献すること」であることを学習した。中道（2014）はパラリンピックにみる障がいのある人のスポーツの歩みは、障がいのある人が社会の中でどのように生き、社会がどのように受け入れてきたのかという、障がいのある人と社会との共生の変遷とも置き換えることができると述べている。「辛い」、「悪い」、「悲しい」、「不幸な」といったネガティブな形容詞について回答しており、障がい者が社会やスポーツとの関わり、パラリンピックの発展による多様性への理解が高まることでパラリンピックや障がいに対してポジティブな印象に変容したものと考えられる。

本研究と同様に栗田と楠見（2010）が作成した身体障がい者イメージ尺度を用いた調査を行っている研究に高校生を対象とした乳井ほか（2020）、松本ほか（2021）がある。授業や体験を受講する前の事前調査において、中学生を対象とした本研究は高校生を対象とした先行研究（乳井ほか 2020：松本ほか 2021）よりも社会的不利因子、同情因子において低い値を示している。松尾ほか（2013）は車椅子運動バスケットボールを中心とした車椅子運動プログラムを実施し、大学生よりも小学生の方が車椅子運動がスポーツへの魅力を強く感じている傾向が見られており、大人よりも障害や車椅子といったもののイメージが固定化されていないと考えられる子どもたちの方が車椅子運動やスポーツの影響力が大きいかもしれないと述べている。本研究において調査した中学生の結果よりも、高校生を対象とした先行研究の方が障がいや障がい者へのイメージがネガティブであることから、より早い年代で障がいや障がい者について学んでいくことで、イメージが固定化されず、ポジティブな思考に変容されやすい可能性が示された。

また、体育理論領域を対象とした授業実践における授業後の効果で、尊敬因子について、中学生を対象とした本研究による実践及び高校生

1年生を対象とした乳井ほか（2020）では有意な変容がみられたが高校2年生を対象とした松本ほか（2021）では変容がみられなかった。松本ほか（2021）による授業内容ではパラアスリートのエピソードやインタビューを通じて、選手の気持ちや観ている自分たち自身の気持ちについて考え、意見を交換する授業展開となっていた。本研究の授業実践や乳井ほか（2020）と同様に、視覚障がい体験、パラリンピックの歴史や理念について学習するなどの知識を習得する活動は設けられているが、「パラスポーツづくり」のように障がいや障がい者の安全やスポーツの楽しみ方について考え、意見交換しながら新たなスポーツを考案するような思考・判断が促される活動は設けられていなかった。上述したように、障がい者と共に安全で楽しくプレイする方法を考案していくことは、まず障がいについて深く考えるきっかけとなり、生徒自身が当事者意識を持ちながら考えていくことが必要となってくる。自分事として考えることで、「視覚障がい」であれば、目を閉じて歩くなどで不便さや不安感を体感でき、安全面への配慮などが具体化できるようになる。大山（2016）は小学生を対象としたアダプテッド・スポーツ授業の効果の検討を行い、「障害者のため（だけ）の」スポーツではなく、「条件を工夫することで多くの人が楽しめるスポーツ」として理解・体験させることが、楽しみや達成の実感といった肯定的体験を誘発させ、障害者との接触はなくとも障害者に対する否定的イメージの緩和を促すことが推察されたと報告している。本研究による授業実践や乳井ほか（2020）による実践においても、大山（2016）と同様の考え方のもと、「パラスポーツづくり」の活動を行っており、障がい者イメージの変容に繋がったことが考えられる。しかし、岡田ほか（2021a）は、パラ教育実践については障がい者イメージの変容に加え、被検者の性別や被検者が受けたパラ教育の経験、障がい者との接触経験に基づいて分析することが必要と指摘しており、先行研究

では、岡田 (2021b) の性別及び接触経験の影響しか明らかになっていない。本研究においてもそれらについては分析できておらず、今後の課題としたい。

## 2) オリンピック・パラリンピックの意識について

オリンピック・パラリンピックへの意識では、全ての質問で有意な変容がみられた。本研究における授業実践ではパラリンピックが共生社会の実現に寄与していることについて理解を深めていくことを目的としており、授業内容のほとんどがパラリンピックに関する内容であったにも関わらずオリンピックについての質問 (①, ③, ⑤) でも有意な変容がみられた (表3)。

オリンピックについては授業の冒頭に、主題となるパラリンピックの学習内容に入る前に、写真等を交えて、オリンピックの目的 (スポーツの価値, 世界平和, 国際親善等) について簡単に説明した。また、授業のまとめでは東京大会の3つのコンセプト (1. 全員が自己ベスト, 2. 多様性と調和, 3. 未来への継承) についてオリンピックとパラリンピックを交えながら説明した。オリ・パラ事業における最終成果報告書 (日本体育大学, 2022, p9~10) においても、時間数や授業形態については異なるものの、オリ・パラ教育によってオリンピック・パラリ

ンピックへの興味・関心が高まっていくことが報告されている。本研究における授業実践においても、短時間であるがオリンピックについて学習することでオリンピックへの意識が高まるということが明らかになった。また、パラリンピックについては、1単位時間を通して、「パラリンピックの発祥及び開催の目的」、「障がい者体験」、「パラスポーツづくり」など、内容的視点及び方法的視点を重視して授業を行うことで、パラリンピックへの意識が高まるということが明らかになった。生徒に対して、授業開始時に「パラリンピックを観たことがある人」に挙手を求めたが、観たことがある生徒は全ての学校で1割程度であった。元々メディア等で取り上げられることが少ないことも影響していると考えられ、本研究ではパラリンピックについての知識を持っていない生徒が大半であった。そのような状態でパラリンピックについて学習した結果、身体障がい者イメージの変容でも述べた通り、上記の学習内容によってパラリンピックへの意識を高めることが可能であることが示された。パラリンピックにみる障がいのある人のスポーツの歩みは、障がいのある人が社会の中でどのように生き、社会がどのように受け入れてきたのかという、障がいのある人と社会との共生の変遷とも置き換えることができる (中道 2014) という考え方からもパラリンピックについて学

表3 オリンピック・パラリンピック大会の意識についての結果 (n=303)

		平均	標準偏差	t 値
①あなたはオリンピックが見たいですか？	pre post	3.05 3.23	1.06 1.00	-3.37**
②あなたはパラリンピックが見たいですか？	pre post	2.85 3.23	1.02 0.96	-6.92**
③あなたはオリンピック (オリンピックの選手) の姿を見ると自分も頑張ろうと思いますか？	pre post	2.82 3.16	0.94 0.92	-6.58**
④あなたはパラリンピアン (パラリンピックの選手) の姿を見ると自分も頑張ろうと思いますか？	pre post	2.83 3.15	0.95 0.91	-6.07**
⑤オリンピック (オリンピックの選手) がスポーツをしているのを見て、あなたもスポーツをやりたいくなりますか？	pre post	2.65 2.86	1.06 1.03	-4.10**
⑥パラリンピアン (パラリンピックの選手) がスポーツをしているのを見て、あなたもスポーツをやりたいくなりますか？	pre post	2.56 2.84	1.00 1.00	-5.51**

\*\* .p<0.01

習することは、大会そのものについて学ぶだけでなく、社会問題について考えるきっかけとなり、生徒にとっては体育という枠組みに留まらず、多岐に渡り学習効果のある教材である可能性が示された。しかし、授業直後にはオリンピック・パラリンピックへの意識が高まっているが、それらの持続性については確認できていない。今後はオリ・パラ教育の実践が児童・生徒に対してどのような行動変容に繋がるかなど、高まった意識の持続性や行動変容について検証が必要であり今後の課題としたい。また、体育教師がオリ・パラ教育を展開できるようになるための環境整備が大切になる（近藤ほか 2017）ことを考えると、今後は授業の効果が確認されている本研究のような実践事例が蓄積され、現場の体育教師が負担なく実践できるようになることが望まれる。

## まとめ

本研究は中学校第3学年の体育理論領域「文化としてのスポーツの意義」における、「国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な役割」の単元において、パラリンピックを教材とした授業の効果を検証することであった。授業プログラムの作成にあたり、岩田（1994）が作成した教材づくりの基本的視点を参考に内容的視点として「学習内容」の明確さ、方法的視点として「学習意欲」の喚起を重視した。効果の検証には、身体障がい者イメージとオリンピック・パラリンピックへの意識の変容について調査及び分析を行った。その結果、身体障がい者イメージでは社会的不利、尊敬、同情の3つ全ての因子で有意な変容がみられた。オリンピック・パラリンピックへの意識についても、6つ全ての質問において有意な変容がみられた。「パラリンピックの発祥や開催の目的」、「障がい者体験」、「パラリンピック映像の視聴」、「パラスポーツづくり」などの学習を行うことは、これまで知る機会、観る機会の少なかったパラリンピックや

パラアスリートについての興味や関心を高めるだけでなく、障がいや障がい者についての理解を深め、生徒自身が当事者意識を持つことができ、障がい者の安全等について、より具体化できるようになったことが意識の変容に繋がったと考えられた。しかしそれらの持続性や行動変容など、日常生活への繋がりについては検証できておらず今後の課題としたい。

## 注

- 1 オリリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議（2016）オリンピック・パラリンピック教育推進に向けて：最終報告。
- 2 オリリンピックを題材とした保健体育の授業における実践研究では、岡田ほか 2021c；松井 2021；宮崎 2012；三宅ほか 2020；松田 2018；小野田ほか 2020；大谷 2021；白波瀬 2018；吉中 2009；和田ほか 2021 がある。
- 3 パラリンピックに関連した保健体育の授業における実践研究では、乳井ほか 2020；藤本と内田 2021；松本ほか 2021；佐々木 2020；鳥居ほか 2021。
- 4 文部科学省（2017）中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説保健体育編
- 5 共生社会とはこれまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。このような社会を目指すことは、我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題である。（文部科学省、online）

## 文献

秋本成晴，澤江幸則：一般の障害者のエンパワメントとしてのパラリンピックの限界：障害種の違いに着目して，体育学研究，65：337-347，2020。  
乳井勇二，秋和真澄，岡田悠佑：高等学校「体育理論」領域におけるパラリンピックを教材とした授業モデルの効果検証：知識と障害者イメージに着目して，日本体育大学総合スポーツ科学研究，9：40-49，2020。

- 藤本佳昭, 内田紗那: パラリンピック競技体験は、直接観戦意欲向上に寄与するのカーボッチャの実技体験・esports 体験から考察するー。研究紀要: 神戸大学附属中等論集, 5: 69-71, 2021.
- 深見英一郎, 吉永武史, 岡田悠佑, 劉素雲, 木浪龍太郎, 青木彩菜: 2019 年度におけるオリンピック・パラリンピック教育実践の取り組み: 早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センターの担当地域に着目して。早稲田大学スポーツ科学研究, 18: 39-51, 2021.
- 岩田靖: 教材づくりの意義と方法。高橋健夫編 体育の授業を創る。大修館書店, pp.26-34, 1994.
- 角田憲治, 大石由紀子, 永瀬開, 藤田久美: 大学生における障害者スポーツの学習が肢体不自由者のイメージおよび障害者スポーツのイメージ与える影響: 体験型授業と講義型授業の比較。山口県立大学学術情報, 11: 51-58, 2018.
- 栗田季佳, 楠見孝: 「障がい者」表記が身体障害者に対する態度に及ぼす効果ー接触経験との関連からー。教育心理学研究, 58(2): 129-139, 2010.
- 近藤智靖, 滝沢洋平, 片桐正広, 田中雄大, 竹内孝文: 中学校体育理論領域におけるオリンピック教育についてー探索的調査を基にした現状把握と課題提起ー。日本体育大学オリックススポーツ文化研究, 2: 47-56, 2017.
- 松田広: 高等学校「体育理論」領域における授業作成の試みに関する研究ー単元「ドーピングとスポーツ理論」の授業評価尺度の開発を通してー。福祉健康科学研究, 13(1): 97-110, 2018.
- 松井賢一: 保健体育授業におけるオリンピック教育の実践例ーオリンピックの教育力と国際友情ー。オリックススポーツ文化研究, 6: 125-130, 2021.
- 松本佑介, 齊藤一彦, 藤島廉, 白石智也: パラリンピック教育が高校生の身体障害者に対するイメージに及ぼす効果の検討ーパラアスリートの映像教材を用いた体育授業を事例としてー。広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」, 2: 95-104, 2021.
- 三宅理子, 阿部直紀, 合田大輔, 高田光代, 信原智之, 藤本隆弘: 教材から知識を問い直す体育理論の授業研究: オリ・パラからスポーツのあり方を考えよう。中等教育研究紀要/広島大学附属福山中・高等学校, 60: 202-213, 2020.
- 宮崎明世: 高等学校におけるオリンピック教育の実践研究: 大学と附属学校の連携による授業実践から。筑波大学体育科学系紀要, 35: 91-101, 2012.
- 中道莉央: 中学校における体育理論の教材研究: パラリンピックに関する題材の場合。北海道教育大学紀要。教育科学編, 65(1): 267-277, 2014.
- 岡田悠佑, 根本想, 乳井勇二: 英文学術誌掲載論文における「パラリンピック教育」に関する研究動向。スポーツ教育学研究, 41(1): 1-14, 2021.
- 岡田悠佑, 金沢翔一, 根本想, 乳井勇二, 鈴木康介: 大学生を対象としたシッティングバレーボール体験の効果検証ー身体障がい者イメージの変容に着目してー。育英短期大学研究紀要, 38: 79-85, 2021.
- 岡田悠佑, 乳井勇二, 根本想, 深見英一郎: 中学校における「オリンピック競技大会」を活用した「体育理論」の授業実践に関する事例研究ー「運動やスポーツの学び方」の内容に着目してー。東京体育学研究, 13: 1-9, 2021.
- 小野田倫大, 伊藤雅広, 滝沢洋平, 松本健太, 近藤智靖: 高等学校の体育理論領域におけるアンチ・ドーピング教育に関する研究。オリックススポーツ文化研究, 5: 149-165, 2020.
- 大山祐太: 小学生を対象としたアダプテッド・スポーツ授業の効果の検討ーゴールボールを教材としてー。北海道教育大学紀要, 教育科学編: 66(2): 253-262, 2016.
- 大谷麻子: 体育理論の教材開発: 運動やスポーツは持続可能な社会の実現に貢献できるのか。研究紀要: 神戸大学附属中等論集, 5: 49-58, 2021.
- 佐藤豊, 友添秀則: 楽しい体育理論の授業をつくらう。大修館書店, pp.141-150, 2011.
- 佐々木浩: オリリンピック・パラリンピック教育実践に関しての一考察: 中学校における取組を通して。初等教育論集, 19: 42-58, 2018.
- 佐々木浩: 小学校におけるオリリンピック・パラリンピック教育に関する実践的研究: 2 年生の I'mPOSSIBLE を活用した授業を通して。初等教育論集, 21: 34-48, 2020.
- 白波瀬勇太: 運動・スポーツの「楽しさ」という視点を育む体育理論の授業実践。研究紀要/東京学芸大学附属小金井中学校, 54: 187-194, 2018.
- スポーツ庁: オリリンピック・パラリンピック教育。[https://www.mext.go.jp/spor-ts/b\\_m-enu/sports/mcatetop08/list/1382302.htm](https://www.mext.go.jp/spor-ts/b_m-enu/sports/mcatetop08/list/1382302.htm), (参照日 2022 年 11 月 7 日)

スポーツ庁政策課学校体育室編：オリンピック・パラリンピックに関する指導参考資料．スポーツ庁政策課学校体育室，pp26-29，36-39，2017．  
東京都教育委員会：<https://www.o.p.edu.metro.tokyo.jp/smile-project>．（参照日 2022 年 11 月 7 日）  
友添秀則，深見英一郎，吉永武史，岡田悠佑，東海林沙貴，竹村瑞穂，根本想，小野雄大，梶将徳，青木彩菜，安田純輝：2018 年度におけるオリンピック・パラリンピック教育実践の取り組み：早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センターの担当地域に着目して．早稲

田大学スポーツ科学研究，17：14-27，2020．  
吉中孝志，海野勇三：実践記録：中学校体育科におけるオリンピック教育の試み．山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，27：59-70，2009．  
和田博史，根本想，大川裕太：アクションリサーチを用いたシーデントップのオリンピック教育の実施過程とその結果－東京都世田谷区立における小学 6 年生の 3 学期末の学年合同スポーツ大会を活用して－．育英大学研究紀要，3：61-79，2021．